作品タイトル　りりりり、凩（こがらし）

著者名　愛美子

あらすじ

砂を噛むような少年時代に孤独なあの人と過ごした夏。
あの日、あの場所に立ち竦んでいたのは一体誰だったのだろう。
決して心を枯らすことのできない僕らの、ぼんやりとした未来への道中。
りりりりと蟋蟀が鳴く。凩に晒されながら、凩に負けないように。

本編文字数　５０００文字

知らないものはすべて知りたくなる性分で、昔から怪我してばかりだ。
街中で流行の邦楽が流れている。いつもそこから逃げるように早足になるのが僕の癖だった。流行の歌ものの直視できないほど真っ直ぐな青さが僕にはどうしても眩しく、何よりも恥ずかしさが逆り最後まで聴くに耐えない気持ちになった。斜に構えた性格の所為で学校ではいつもクラス中の話題に一人取り残されていた。何度か無理をしてそれらに同調しようと試みたこともあるがどうも失敗に終わる。同級生と手を取り合い肩を組みこの時代に見合った楽曲を熱唱する彼ら彼女らの、一路に青春を疑うことなく全身で謳歌する姿へ激しい羨望を抱く反面、どこか深く軽蔑していたという方が正しい。けれども、あの人の時折口遊む少し音痴な歌だけはなぜだか堪らなく好きだった。

二〇〇八年、僕が生まれて十四年目になる年。東京駅では当然のように平凡なクリスマスソングが響き渡り、見渡すと明滅する淡い蛍光灯がいやにチラついた。この時期に僕は、中学校の教師として働く父親の仕事の都合で、東京から山に囲まれた辺鄙な田舎町へ転居する運びとなった。何もかもが手に入り便利と呼ぶに相応しい街から一転、駅やスーパーまで三十分以上車を走らせることを必然とする町へと転がり込んだ。幼いながらに卑しい都会の喧騒に嫌気が差していた僕は、この町の何も無い部分を大変有難く気に入った。ふた月ほど住んでみた頃に気付いた不満を挙げるとすれば、この町に住む大人たちの閉塞的な環境ゆえに生じる一面的なものの見方や知識の不十分な具合、クラスメイトたちのあまりにも純真無垢な姿には、反対に情報過多な環境に触れてきた僕にとって常に痒い所に手が届かないようなもどかしさが残り続けた。

僕がこの町の住民として生活を始めて三ヶ月が経過した頃だろうか。登下校の時間、給食、掃除の時間等につい耳を欹ててしまう校内放送の声があった。その声の正体がどうにも無性に気になった僕は、下校の時間になり放送室前に自然と足を運ばせていた。そこで、その声の正体が〈浅野真由美〉という名の人物だということが判明した。一つ隣のクラスで窓際の席に座り、よく頬杖をついて外の景色を眺めている。初めて彼女の姿を目にした時から、やや憂いを帯びた横顔が妙に印象に残っていた。活発な印象はないが、とはいえ暗さもなく、強いて言うならば他の同級生とは圧倒的に『何かが違う』独特なオーラを放っていた。何もかも見通すような澄んだ瞳とその動じない凛々しさは、まだ恋の真似事をしていたい年頃の青少年には理解が追いつかないような官能的な魅力さえ持ち合わせていた。心と躰のアンバランスな具合が十四歳の彼女をさらに魅力的に見せていたように思う。

あの人とあの声が同一人物だと知った時、僕はなぜだか初めて胸が高鳴るという体験をした。給食時間の放送では彼女自身がセレクトした音楽を流すことがあり、それは僕の知らない随分と大人な音楽の世界だった。クイーンにはじまり、スティーリー・ダン、サイモン&ガーファンクル、10cc。六十年代から九十年代の楽曲まで、その知識量は多岐に渡る。彼女が放送担当の日に限っては普段は騒がしいクラスメイトたちも黙食してしまうような不思議な魔法が掛かっていたし、僕はこの時はじめて音楽に心震わされ、そのすばらしさを学んだ。そうして彼女を気に掛けて過ごすうちに、彼女は週に一度、近くの図書館で詩の朗読会に参加しているという情報も容易に入手できた。

その日僕は、母親から渡された端金を片手にマンションから徒歩十五分ほどの場所にある理髪店へと向かった。週に一度の頻度で伸びた髪を切らなければ、この町の学校では校則違反に値する長さまであっという間に伸びてしまう。休日の貴重な時間を散髪に費やすというのは毎回どうも納得がいかないが、この日の僕はいつもより少しばかり気分が前向きだった。というのもこの日は、例の図書館で〈浅野真由美〉が詩の朗読会に参加する日だ。幸運なことに図書館と理髪店の距離は徒歩五分ほどの場所にある。柄にもなく、心を弾ませながら僕は歩いた。計算通りだ。僕が髪を切り終え理髪店を出た頃、道路越しの図書館の入り口から浅野真由美の姿が見えた。しかし彼女はこちらに気づくはずもなく、ゆっくりと何者かと話をしながら歩いてくる。見たことのない自然体な姿でその人物へ笑顔を向けている。遠くからでも分かるほど、彼女とお似合いの身なりをした同世代の青年だった。いや、体格のよさと醸し出される余裕から彼の方が一つか二つばかり歳上かもしれない、と僕は思った。この時期の年齢の一つや二つの差は僕らにとっては大差であった。そして彼は彼女と同じ詩の朗読を趣味としているのだ。僕は天から地に突き落とされたような遣る瀬なさに駆られ、その場に立ち竦んだ。この頃の僕は、僕自身を励ます豊かな音楽を何ひとつ知らなかったし、詩も文学も映画も、何ひとつとして深く知ろうとしていなかった。名前も知らない青年への嫉

妬心と同時に、都会で周囲を見下していた自分を、はじめて大いに恥じた瞬間だった。

暫くの間、僕はちいさな失恋の味を噛み締めていた。彼女の放送の声を聞くと、胸がつんと劈くような痛みが走る。廊下ですれ違う彼女の姿をつい目で追ってしまう。これが初恋なのだと思った。つまり僕は初恋と失恋をほとんど同時に経験した。そうして少しずつ季節は過ぎて行き、校庭には桜が咲きはじめた。僕らにとって最後のクラス替えだ。あれから僕は彼女の影響でたくさんの音楽や詩集に触れた。そうするうちに自然と浅野真由美の好みや美学が僕を形成するようになった。そして幸運なことに、僕と彼女は同じクラスになり、名前順に並べられた最初の席で隣同士となる。あまりに突然の距離の縮みように戸惑い、心臓が背中から飛び出しそうだった。「浅野です。よろしく」憧れの人が僕だけを見つめてそう言った。「知ってます、よろしく」と、思わず口にした。

「どこかで話したことありました？」浅野真由美がきょとんとした顔をして僕へ問う。

「いや、放送で。」

「ちゃんと聞いてくれとる人おるなんて。嬉しい」

「聞いてます。いつも流す音楽が気になって、つい調べて聴いてます」

自分でも不思議なほどに自然と言葉が溢れてきた。そして彼女はとても嬉しそうな表情で僕の話を聞いてくれた。遠くから眺めていた頃のクールな印象とは大きく異なり、とても親しみやすく優しい人であることが僕の気持ちをさらに温かくした。

夏が来るまでの間、二人でいろんな話をした。彼女の影響で集めたCDのこと、彼女の好きな詩集について、彼女は深夜にテレビで放送される古い映画も大好きで、この町には映画館がなくそれらを観ることができないと嘆いていたこと、東京にはたくさんの映画館がありいつか一緒に行こう、と話をしたこと。ときおり歌いだす少し音痴な鼻歌は、その度に僕の心をくすぐった。互いに自らの家庭について多くは語らなかったが、彼女はおそらく複雑な家庭環境にあり、自分の目つきや態度が他人の目にどう映り影響を及ぼすのかという点においてとても自覚的だったように思う。その背景が彼女の独特な存在感を作り出していた。僕が彼女の繊細な部分に触れられるようになるのは、ずいぶん先になるだろうとも思った。

そうして刻々と時間は過ぎ、もう僕らはすっかり夏だった。彼女は夏休み前にお気に入りの映画をダビングしていくつか貸してくれると言い、僕ははじめて彼女の家に迎え入れられた。その日彼女の母親は留守にしていて、家にはふたりきりだった。互いに間隔をとりソファに腰掛け、しばらくすると彼女はブラウン管の傍にある戸棚の扉を開いた。五十音順に整列されたVHSが姿を見せる。彼女が時間をかけてダビングしたことが一目でよくわかる。丁寧にラベルが貼られていて、監督の名前と年代まできっちりと書かれている。そんな彼女の孤独の時間をとても愛おしく思った。彼女は細い指先でその文字の上をなぞる。指先がぴた

りと止まり僕と過ごす時間に選ばれたのは、彼女が九つの頃に逝去した父親が遺していたというマイク・ニコルズ監督作『卒業（1967）』だった。今ではよくありふれた結婚式にちょっと待ったの元祖的な映画だ。この日の僕らはきっと日本中の誰よりも早熟な十五歳だったにちがいない。そんな気分にさせてくれた時間のことを、今でもよく覚えている。

夏休みにも僕たちは宿題をするなどの口実をこじつけ、週に一度ほどの頻度で遊んだ。例の図書館でこの日の宿題を終わらせ、肩を並べて歩く帰路の途中で、彼女の足が突然止まった。彼女は遠くを見つめながら「夏なんてはやく終わればいいのに」と言った。僕にはその意味がよく解らなかった。彼女の視線の先をよく見ると、あの冬、図書館の入り口で浅野真由美と仲睦まじく寄り添っていた青年が、別の女性と歩いていた。二人は手を握り、幸福を同じ顔に描いて歩いている。僕と浅野さんは立ち止まり、その様子をぼうっと眺めていた。実際の時間は十秒ほどであったが、三十分くらいの時間が経過したように感じた。ふと浅野さんのほうに視線を向けると、彼女はきれいに涙を流していた。

この時期の僕は、すっかり彼女についてわかったような気でいた。彼女のほしい言葉も美学もそれなりに習得し、彼女を喜ばせることなら何でもできるような気になっていた。すっかり浮かれていた僕は、彼女も僕に対してきっと同じ気持ちだろうと思っていた。たぶん僕は浅野さんの心のずっと中のほうにある空洞についてちっとも理解できていなかったのだ。そしてそれは僕がどんなに努力を重ねても、触れることのできない領域であることを悟った。そう察するには、彼女のあまりにも雄弁な横顔だけでもう十分に事足りた。

「ごめんなさい」

彼女はそう言って俯いた。どうして僕に謝るのだろうか。僕はいちいち彼女の言動の意味を深読みしていた。それは僕の好意に対する謝罪なのか、それとも別の何かを思い浮かべてのことなのか。どちらにしても僕には、かけるべき言葉がひとつも見つからなかった。「帰るね」と彼女は言い残し、真っ赤な瞳に涙を浮かべてその場を走り去った。

あれから彼女についての多くのことを書き込んだ僕だけのノートはきれいな白紙に戻された。翌日も、そのまた翌日も浅野さんは僕を避けた。そしていつしか全く交わらない関係へと戻っていた。僕には浅野さんが解らない。いくら頭で考えても仕方のないことだと自分に言い聞かせ、やけに落ち着きを見せて静まり返る僕と、いきなり暴れはじめる僕とが拮抗する。ぼやけていく彼女との時間を反芻し、僕に向けてくれた表情のひとつひとつや言葉の意味を、何度もくりかえし考えた。真夜中にいくら目を閉じてもそのことが離れず眠りにつけない。僕は彼女にとって、あの青年の代役だったのか？僕にその役目は果たせなかった、ということなのだろうか？どうすることが正しかったのだろうか？———そんなことを一日中ぐるぐると考えていた。彼女の言動が僕の頭の中を占領し続けた。こんなことならばもうい

っそのこと、あの砂を噛むような日々でもいい。彼女の存在しない世界へと戻りたかった。何もかもが、はじめてのことだった。

秋の気配が漂う季節になり、浅野真由美は東京へ転校する運びとなった。それは当日、担任から唐突に発表された。当然、僕も知らないことだった。浅野さんはこの日、ほんとうに久しぶりに僕と目を合わせた。けれども、もうその視線には心の宿りを感じ取れなかった。ああきっとこれは夏の終わりを意味しているのだ、と悟った。

「もうすぐ卒業間近だというのに」僕は帰り際に彼女に声をかけた。案外すんなりと声に出せたように思う。こちらを向き僕の目をじっと見て彼女は言った。

「十年後にもし会えたら、その時はいろんな話をしよう」

その表情と言葉には、しっかりと血が通っていた。久しぶりに近い距離で見た彼女の顔立ちはハッとするほどきれいで、出逢った頃のアンバランスさはすっかりなくなり、数ヶ月の間に別人のように美しくなっていた。ふと、なぜだか彼女に背中をぽんと叩かれたような気がして、背筋が伸びた翌朝、あの日々の温もりがこの体から離れていく感覚を、僕ははじめて知った。